『讃岐典侍日記』
――下巻における執筆意識の変化について（一）――

内田　志穂

（一）

上巻の堀河帝崩御以降は、堀河帝から寵愛を受けた等の私的立場からの意識を押さえ込み、悲しみを抑圧した結果、自らの言葉で堀河帝を失った悲しみを表現せず、典侍という公的立場からの意識のみで、長子は日記を記していた(注1)。その公的立場からの意識は、下巻にどう繋がっているか、また、私的立場からの意識はどこから解き放たれるのかを、嘉承二年十月から天仁元年五月までの下巻前半について、考察してゆきたい。

（二）

下巻の始めは、崩御後の約三ヵ月後の嘉承二年十月から、白河院からの、弁三位を通しての鳥羽帝への再出仕要請から始まる。この十月の記述は、二帝にまみえるということに対しての動揺、否定、世間に対してどのように自分が思われるか、また、出仕は自ら望むことではないこと等を強調する。そのうえで、先人の自分と似通った境遇、またはその和歌を引き、或いは人の和歌を改変して、長子の気持ちを表現している。

具体的に挙げてゆくと、まず、長子は鳥羽帝に仕える意思はないことを繰り返す。弁三位からの、白河院の意向である鳥羽帝再出仕の要請の文を見た折、「あさましく、ひが目かと思ふまで、あきれられける」とひどく驚

き、「故院の御かたみには、ゆかしく思ひまゐらすれど、さしいでんこと、なほあるべきことならず」と、出仕することはよくないと記している。そして、「げにこれも、わが心にはまかせずとも言ひつべきこと」だから、尼になろうかとも思うが、このように出家することは世間も馬鹿なことをしたと言うようだし、心底から尼になる気はない。それならば、思い悩むうちに、「心づから弱りゆけかし。さらばことづけても」と、なんとか辞退しようとする様子が記されている。

しかし、このように返事を延ばしつづけた長子に、院宣が下る。

「内蔵頭の殿より、人参らせたり。『院宣は、摂政殿の承りにてさぶらふ。堀河院の御素服賜はりたらば、とく脱ぐべきなりと宣旨くだりぬ。とく脱がせたまへ』」と言ひにおこせたり。

かばかりのことだに、心にまかせず、道理に脱ぐべきをりも待たず、脱ぎてんこと、心憂きに、「芹つみし」と言ひけん故事を、身に思ひよそへらるる。

（再びの出仕　三）

このように、逆らえるはずのないことを記し、自分の意志は無視され、思いどおりにならないことを述べている。加えて知人、家族の意向も、白河院に従うべきだという客観的な意見を、二度にわたって確認する。

① 頼みたるままに、例の人呼びて、「かうかうなん院より仰せられたるを、いかがはせんずる」と言へば、「いかがせさせたまはん。世の中わづらはしくさぶらふめり。ただとくおぼしめしたつべきなめり。参らじとさぶらはば、わがためにこそ、よしなきこと、いでまうで来め。わが君、さるべきとおぼしめさせたまふべきに」など、沙汰しあひたるほどに、―中略。

（再びの出仕　三）

② かく沙汰するを聞きて、せうとなる人、「あはれ、男の身にて、かく言はれまゐらせばや。うらやましくもおぼえさせたまふかな。女の御身にて、さらでもありなん。故院の御時に、年ごろの人たち、御乳母子たちなどの、賜はりあはれし素服を、何ばかりの年ごろさぶらはせたまはざりしかど、賜はらせたまふ。今の御時に、また、なほ大切にいるべき人にて、月も待たず脱げと、宣旨くだるもあやし」など、言ひつづくるを聞くほどに、あぢきなくはづかし。

（再びの出仕　四）

これらの結論のもとに、逡巡した後、自らの運命とし、

宿縁であると自身を納得させて、再出仕を決意する。これらは、日記中では嘉承二年十月末までに起こった出来事とされている（注2）。

そして、この十月までの日記にも、上巻末の意識に共通するもの、また、新たに見られるものが混在する。共通するのは、

花山院のをりに、惟成の弁を、入道殿、一条院にわたりて、「もとのごとく、六座にて使はん」と仰せられけるをだに、わが君に仕うまつりしことの、それにつけても思ひいでられぬべければ、官位を捨てて、法師になりにけん。「わが身の、何の思ひ出にて、いにしへのはづかしさに思ひこりず、さしいづべき。あまたの女房の中に、などわれしも、二代まで、かくはあるまじき目を見るべからん」と思ふに、―中略。

（再びの出仕　四）

このように、自分と同じ状況にある先人の例を挙げてそれに同調している。つまり、人の嘆く姿に自分を重ね併せ、自らの気持ちを代弁させている手法（注3）が見られること、堀河院を失ったことに対する悲しみが、いまだ長子自身の言葉で直接表されていないこと（注4）の二つである。

新たに見られるものは、先人の逸話を引くことで自らの気持ちを代弁させることに加え、

イ周防内侍、後冷泉院におくれまゐらせて、後三条院より、七月七日参るべきよし、仰せられたりけるに、

天の川おなじ流れと聞きながら
わたらんことはなほぞ悲しき

と詠みけんこそ、げにとおぼゆれ。

（再びの出仕　一）

や、再出仕を思い悩むうちに、

ロ―中略、袖のひまなく濡るれば、

かわく間もなき墨染めの袂かな
あはれ昔のかたみと思ふに

（再びの出仕　二）

などのように、二帝にまみえることの悲しさや自分の心情・状況を、先人の和歌を引いて代弁させていることである。

しかし、ロは、父顕綱の『顕綱朝臣集』八一（『私歌集大成』）

故院のうせさせたまひたりけるに
かはくまもなきすみそめのたもとかな
くちなはなにをかたみにもせん

を本歌としたもので、形は独詠歌であるが、そのほとんどを本歌に依っている。よって、ロは独詠歌というよりも、引歌の意味合いが強くなる。

これらは、上巻末の場合と同じく、自分と同じ立場・状況の人物を探した結果、二帝にまみえるという特殊な例であったため、堀河帝の女房でもあった周防内侍の和歌を引用し、身近な存在であった父頭綱の和歌を本歌としたのであろう。

また、一句だけを取り込むなどした手法も見られる。傍線部1以外にも、再出仕要請が始まった後に悩んでいる際、

—中略、心のうちばかりにこそ、海人の刈る藻に思ひ乱れしかど、—中略。　（再びの出仕　二）

のように、『古今和歌集』雑下読人しらず、九三四「いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる」を踏まえて、思い乱れる心をあらわしている。また、再出仕を決意した後に、

—中略、「藻に住む虫のわれから」とのみ、世にありてかかる目も見ること悲しけれど、さてあるべきことならねば、いそぎたちぬ。　（再びの出仕　四）

のように、『古今和歌集』恋五典侍藤原直子朝臣、八〇七「あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかめ世をばうらみじ」の二句、三句「わたしのせいで」という和歌の意を踏まえて、引用している。

和歌は、上巻では一首・一句たりとも見られなかった。その和歌を載せる余裕の無さが、上巻における精神状態を著していると考えられ、逆に和歌を載せる余裕が、崩御から二ヵ月以上の時を経た下巻に顕れていることを示している。

また、上巻末に「最後までお仕えした女房」として、公的立場を第三者から認められたことを記し、誇示していたことは、対読者意識があらわれた初期段階であり、最初の自己存在の確認（注5）でもあった。これらが、崩御から約三ヵ月経ち、対読者意識が長子のなかで、完全ではない（堀河帝を失った悲しみを自らの言葉で記さず、寵愛を受けた私的立場を誇示していないという意味で）が、固まってきた。その結果、余裕の出てきた下巻で、この日記の価値を高めるために体裁を整えようとした為、和歌を取り込もうとしたのではないか。この下巻の始まりである嘉承二年十月に、他の月次には見られないほどの、引歌が集中しているのも、その結果と考えられる。

その対読者意識を裏付けるような要素が他にも見られ

る。鳥羽帝に出仕することを、第三者に言い訳をしている箇所が見られることである。

③　おはしましをりより、かくはきこえしかど、いかにも御いらへのなかりしにぞ、「さらでも」とおぼしめすにや。それを、いつしかと言ひ顔に参らんこと、あさましき。　（再びの出仕　一）

④　―中略、いかなるついでをかとりいでん、さすがにわれとそぎ捨てんも、昔物語にも、かやうにしたる人をば、人もうとましの心やなどこそいふめれ、わが心にも、げにとおぼゆることなれば、さすがにまめやかにも思ひ立たず。　（再びの出仕　二）

③は、生前堀河帝が、長子を鳥羽帝の乳母にという白河院の要請に対して返事をしなかったものが、堀河帝が崩御したからといって、再出仕をすぐ受け入れては、本当は待っていたかのようだと、他人の目を意識した言い訳をしており、④では、出家することも、物語には世間の人は馬鹿なことをすると批判したことを理由にあげ、長子自身もそう思うので、尼になる気持ちも起こらない、など完全に人の目を考慮したものである。他に、先に挙げた①は院の意向に従う他はないとわかっていながらも、第三者の判断を仰ぎ、世間から見た、長子の取らざるを得ない進路の確認を得る、というかたちで記されている。また、②で「せうとなる人」が長子に対して、堀河帝からも素服を頂く立場でありながら、さらに鳥羽帝の乳母として白河院からも必要とされていることを、羨んでいる会話をわざわざ記すことは、第三者の客観的な視点からも、長子の必要性を認められたことを示し、独りよがりではないことを確認づけている。これらは、裏を返せば、長子自身に対しての言い訳、言い換えれば、再出仕への正当化である。また、鳥羽帝へ再出仕することで、堀河帝の生前の意向に反するという、後ろめたさからくる弁明でもある。

以上のように、先行歌人の和歌をひいたり、逸話を伴うことは、読者を意識するが故の行為であったとしても、これらの表現（和歌）を第三者に依存し、また、第三者に批判されまいとする姿勢は、長子の自己に対する評価の低さが伺えるのではないだろうか。

和歌の才能の無さ（注6）も一因であろうが、堀河帝の寵愛を一身に集めていたわけではなく（注7）、堀河帝崩御直後に、名ばかりの過去の公的立場のみが残り、堀河帝が亡くなった今、自分の存在は何であったか、また、これからは何を頼りに生きてゆくのかを考えざるを得ない日々

の中で、再び新しい公的立場が与えられ、自分という存在意義を確認することのできる再出仕は、自身が必要とされている人間であるという、自己存在の確立の過程であったはずである。それゆえに、悲しみを解放する時期を逸していることもあるが、この再出仕で揉めている十月の間、堀河帝の在世中からの白河上皇の希望であった、長子の鳥羽帝出仕に反対していた堀河帝に対して、悲しみの言葉等を一切触れることがなかったことは、堀河帝に対しての後ろめたさの意識があるために、自己のことのみに終始したのではないだろうか。

（三）

ところで、嘉承二年十一月までの記で、作為されている箇所がある。鳥羽帝即位式の帳あげの奉仕役であった大納言の乳母が、実父公実の死去に伴い、退くことになり、代役に急遽長子に院宣が下り、やむなく再出仕を決心する箇所である（公実は嘉承二年十一月十四日夜に死亡、即位式は同年十二月一日。『中右記』による）。この日記においては、宣旨が下り、再出仕の決意を固めるのは、十月までの話としてあるが、これらは史実に沿うならば、十一月十五日以降にかけて起こったことである。この嘉承二年は、閏十月のある年であり、前月の十月二十六日には、女官の除目があり、他の女房の従五位下、六位上が任命されていた（『中右記』による）。

勅旨

内侍司

典侍従五位下藤原朝臣悦子

典侍従五位下藤原朝臣実子

掌侍正六位上源朝臣長子

掌侍正六位上高階朝臣為子

掌侍正六位上藤原朝臣方子

嘉承二年十月廿六日

日記には、弁三位殿から「御乳母たち、まだ六位にて、五位にならぬかぎりは、物まゐらせぬことなり。この二十三日、六日、八日ぞよき日。とくとく」とあり、十月二十三日までに、弁三位から、最初の催促の文が来ていたことがわかる。そして、

かやうにてのみ明け暮るるに、「かく里に心のどかなること難し。―中略。」など、思ひつづけられて過ぐすほどに、[2]御即位など、世にののしりあひたり。

と日数が経ったことがわかる記述がある。また、小谷野氏は、傍線部2から、即位の噂がたつのは、『殿暦』閏十月九日条「今日於二高陽院一御即位并立后事一定、上達部一両来…」により、徐々に人々の口の端にのぼるに至ったもの(注8)とされている。つまり、遅くとも閏十月下旬までには長子の耳にも即位の噂は入っていたと考えられる。

これら公実の死とそれに伴う再出仕決定は、史実の面からいうと、十月、閏十月を経て、十一月中旬以降に決定したとしか考えられない。何故、長子は、意図的に閏十月を記さず、再出仕決定を十月中に起こったこととしたのか。

まず、十一月の記は何が記されているかというと、雪の日の命日参詣だけが記されている。十月には命日には全く触れられていない。この十一月の記は、参詣しようとしている長子を、大雪の為、出仕までの日がなく準備に追われている為として、従者達は反対する。それに対して長子は、

「人たちによしと思はれんとて参ることならばこそあらめ、この月ならんからに、いそがしとて欠くべきことかは。いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、それに障るべきことかは。われをすこしもあはれと思はん人は、けふぞ参らせよ」と言ふままに、けしきも変はるがしるきにや、―中略。

と従者達を説き伏せ、参詣する。そして堀河院に参ると、そこにいた人々は、

「あな、いみじ。例よりも日たけつれば、『けふはえ参らせたまはぬなめり』『ことわりぞかし。いそがしくおはしつらん』と申しあひたりけるに、おぼろけならぬ御志かな。けふは」とあはれがりあひたり。

十一月も、はかなく過ぎぬ。　(再びの出仕　五)

と、人々の称賛をあびたことを記している。傍線部3のように無理を言って、大雪のなか、参詣を強行したことを記したうえで、人々の称賛を受けたことを記していることは、長子がいかに鳥羽帝よりも堀河帝に重きを置いてるかの、世間に対する弁明である。そして、「十一月も、はかなく過ぎぬ」と時の流れの無情を記していることは、堀河帝を失った悲しみを直接的ではないが、醸しだす役目をしている。ただし、このような間接的な記や、先に挙げた、堀河帝が生前鳥羽帝へ出仕することに反対していたという記を除けば、翌年正月までは、堀河帝に対する長子の直接的な感情や思い出などは、一切触れられていない。

わざわざ、再出仕の決心を十月までとしたことには、長子の記憶違いということも考えられるが、やはり、ここは作為によるものと考えられる。何故なら、自らの再出仕のことが頭を占め、再出仕を決めた時には、既に十一月の命日が目前であったはずである。その間、堀河帝のことは忘れてはいないものの、中心は自分の身の振り方であり、十月、閏十月の命日参詣のことは記す余裕がなかった。しかし、再出仕を決定した途端、その「いさましくうれしきいそぎにてあらん」準備に追われる中、命日参詣を大雪の中強行したと記すことは、途端に身を翻すような白々しさが強調されるおそれがある。二帝に仕えることをあれほど否定し、世間をあれほどまでに気にする長子の性質からいっても、この誤解を招くおそれのあることは避けたかったのではないか。更に付け加えるならば、命日参詣は、再出仕の話とは切り離して、独立させて十一月に位置づけることが、長子自身の堀河帝に対する、せめてもの釈明としていたとも考えられる。

そして、十二月一日、鳥羽帝の即位式が行われ、華やかな儀式の中、帳あげに奉仕していた長子は、

手を掛けさするまねして、髪あげ寄りて針さしつ。「わが身いでずともありぬべかりけることのさまかな、などかくしおきたることにか」とおぼゆ。

（再びの出仕　六）

と、このような形だけの役目ならば私でなくともよい、と記している。これは長子にしてみれば、無理やり素服を脱ぎ、勇気を振り絞って再出仕を決めるほどのものであったのかという疑問からくる感情である。ただし、この感情には、この役目が形ばかりの意味しかないという、即位式における自分の存在意義が軽かったことに対する失望と不快が根底にあると思われ、ここにも、自らの存在意義についてこだわる長子の姿が伺える。

以上のように、下巻の始まりである嘉承二年十月から十二月にかけての四ヵ月間は、堀河帝崩御後から続く、過去の名ばかりの公的立場に縋っている状況を回復し、自らの存在意義を持ち得る可能性のある、再出仕への決意の過程であり、その決意を自己弁護し、正当化する過程である。これは、移り身が早いと批判されることを恐れ、自ら望む再出仕ではないと第三者への言い訳をしていると同時に、生前から白河院よりあった鳥羽帝への出仕要請を拒否し続けていた、愛する堀河院に対する弁解でもあり、自己評価の低い長子自身の、自己存在の意義を確立したいという意識との錯綜する期間であったのではな

いか。

それゆえ、堀河帝を失った悲しみを、ましてや寵愛を受けた私的な思い出などは、堀河帝崩御後から抑圧されたまま、その解放する時期を逸している。そして、鳥羽帝再出仕の決意後に、独立させた十一月の命日のみを記すことは、この時期の長子にできる最大の堀河帝への追慕である。おそらく、再出仕を決めるまでの期間、またはその決意の直後に、堀河帝を追慕し、その喪った悲しみを記すことは、大仰にいえば堀河帝を裏切ることになる、長子の堀河帝への罪悪感から記しえなかったことと思われる。

（四）

では、嘉承二年十月から十二月までの四ヵ月の意識が、天仁元年（嘉承三年）正月からどのように変化してゆくのであろうか。

嘉承二年十二月末に、再び白河院から鳥羽帝への伺候の要請があり、天仁元年の元日夕方に、御所に赴く。実際に伺候するのは正月二日からである。その二日の早朝、

つとめて、起きて見れば、雪いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、別にたがひたることなき心地して、おはしますらんありさま、他事に思ひなされてゐたるほどに、「降れ降れ、粉雪」と、いはけなき御けはひにて仰せらるるきこゆる。「こは誰そ、誰が子にか」と思ふほどに、まことにさぞかし。思ふにあさましく、これを主とうち頼みまゐらせてさぶらはんずるかと、頼もしげなきぞあはれなる。昼ははしたなき心地して、暮れてぞのぼる。

――中略――。

走りおはしまして、顔のもとにさし寄りて、「たれぞ、こは」と仰せらるれば、人々、「堀河院の御乳母子ぞかし」と申せば、まこととおぼしたり。ことのほかに、見まゐらせしほどよりは、おとなしくならせたまひにけりと見ゆ。

一昨年のことぞかし、参らせたまひて、弘徽殿におはしまいしに、この御かたにわたらせたまひしかば、しばしばかりありて、「今は、さは、帰らせたまひね。日の暮れぬさきに、頭けづらん」と、そそのかしまゐらせたまひしかば、「今しばし、さぶらはばや」と仰せられたりしぞ、いみじうをかしげに思ひまゐらせたまへりしなど、ただ今の心地して、かきくらす心地す。

その夜も、御かたはらにさぶらひたれば、いといはけなげに、御衣がちに臥させたまへる、見るぞあはれなる。　（諒闇の月日　一）

と、頼ることのできた大人の堀河帝と幼すぎる鳥羽帝との、あまりの違いに愕然とする様子がわかる（A）。子供である鳥羽帝に、長子は堀河帝のような分別がある、立派な天皇の資質があるとは思っていなかったであろうが、これほどまでに幼い様子に、長子は落胆する。そして、堀河帝崩御後初めてともいえる、堀河帝についての具体的な思い出が語られる（B）。続いて、正月三日、

明けぬれば、――中略――ものなどまゐらすれば、うけくにして召すぞあはれなる。

昼つけて、殿参らせたまひて、人々居なほりなどすれば、物をまゐらせさして立たんも、「おとなにおはしまいしにぞ、さやうのをりも分かず立ちしか。また、おとなしくなども告げさせたまひしか。これは、うちすてて立たば、よきことや言はれんずる」と思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりけることを、心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らざらん。

――中略――。

いかなりし世に、「陪膳は誰ぞ」と問ひて、「それがし」と聞かせたまうては、御舌さしいでさせたまひて、指貫高く引き上げて逃げさせたまふとて、人々笑ひ興じまゐらせしは、ひと所の御勧盃にてありける、と思ふに、何の御かへりかは申さん。　（諒闇の月日　二）

この後、摂政忠実が、堀河帝の病床に忠実が参内した折に、伺候していた長子を、堀河帝が膝の陰に隠したエピソードを話しかけたことを記し、この正月元日からの記を終える。

この正月の三日間に共通するのは、鳥羽帝がいかに堀河帝に比べて頼りにならないか（A、E）ということと、鳥羽帝の幼さからくる愛しさの表現（C、D）の繰り返しが列挙されている。また、自ら状況判断する際にも、「うちすてて立たば、よきことや言はれんずる」と、やはり周囲からの批判を気にしていることがわかる。

また、これらの合間に、B、Fで、崩御後初めての堀河帝に関する具体的な思い出が語られる。これらは、その場での登場人物である、鳥羽帝と堀河帝、または摂政と堀河帝という関係の思い出であり、これは女房としての公的立場から思い起こしたものである。加えて、これらは思い出が呼び起こされる起点となるものがあって、はじめて具体的な思い出が語られる。これは、上巻末での

悲しみの表現が、目前の周囲の悲しむ姿によってのみ、誘発する手法が発展したもの、つまり、悲しみや思い出が具体的な或る事象などのきっかけにより生じる、というものである。また、忠実から語られる「御膝の陰」は、あくまでも第三者から述べられたものであり、長子自らが思い起こしたことではないという形をとっている。そして長子の対応も、「聞くぞ。げにと心憂き。」とだけ触れており、この時点では、堀河帝から寵愛を受けていた、という片鱗は覗かせるものの、自らは積極的にその事柄を支持していない。つまり、この時点では、私的立場を強調する意識が、まだ解放されていない。

そして、正月のその他の記は、再び命日参詣に戻る。

正月になりぬれば、この月ならんからに、欠かじと参りて、堀河院に参りたれば、人々、「いかで参りたまへるぞ。内裏にと聞きまゐらせつるは、この月はよもと思ひまゐらせしに」と言ひあはれたり。

「いかでか参らざらん。仕うまつり果てんと思へば、いみじういそがしかりしにだにも参りしを」と言へば、「まことに、かく欠かず参らせたまふことのありがたさ」など言ひあひつつ、―中略。（諒闇の月日　三）

嘉承二年の十一月と同様、命日参詣を跨張し、鳥羽帝に仕える現在も、堀河帝には「仕うまつり果てん」と決意し、人々に称賛されたことを記している。

この天仁元年正月は、嘉承二年十二月までの意識が続いているが、再出仕が始まったことで、再出仕への正当化の理由付けは無くなり、かわって堀河帝と鳥羽帝との落差を強調しはじめ、堀河帝の具体的な思い出を記し始めるという、同二年十二月までにはなかった大きな違いがあるため、一線を画したい。

二月は、堀河帝の命日が長子の身内の忌日と重なり、専らその故人のことに終始し、堀河帝については触れられていない。

三月もやはり堀河院の命日参詣を記している。

三月になりぬれば、例の、月に参りければ、堀河院の花いとおもしろく、兼方、三条院におくれまゐらせて、

いにしへに色もかはらず咲きにけり
花こそものは思はざりけれ

と詠みけん、げにとおぼえて、花はまことに色もかはらぬけしきなり。

―中略―。内裏にてありし所ども、さびしげなる見るにも、亡せさせたまへりけん院の中の、ひきか

ニ へかいすみ、さびしげなる、御覧じて、

影だにもとまらざりける草のうへを

玉のうてなとたれかいひけん

と詠ませたまひけん、げにとぞおぼゆる。

宮の御かたに、三十講を行はせたまふとて、―中略、講など果てて、御前近く三位殿を召せば、さぶらはる。宰相とてさぶらはるる人、「三位殿は、いますこし近く参らせたまへ。典侍殿は、いまははづかし」と言ふを聞かせたまひて、「それしもこそ志見ゆれ。見だてなく、思ひいでもなげに見ゆる所を、忘れず見ゆる」と仰せられも果てず、むせかへらせたまへる音のきこゆるに、われも堪へがたし。

（諒闇の月日　五）

ハの兼方の『金葉和歌集』（二度本）雑上、五二四、初句の「こぞ見しに」が「いにしへに」になっている。また、「三条院」は後三条院の誤りであり、『讃岐典侍日記』の諸本も「三条院」である。堀河院には嘉承元年十二月廿五日に遷御しており、そのまま同二年七月十九日に崩御していることから、「こぞ見しに」のままでも、去年も今年も堀河院の花は変わらないとなり、内容的にも、去年は堀河帝が生きていらっしゃったということが強調され、悲哀がさらに増すにも関わらず、何故「いにしへに」とし、漠然とした「過去」を示したのであろうか。また、長子が仕えたとする八年の間に、嘉承元年以前に堀河院に遷御したのは、長治元年十二月五日～長治二年六月七日の半年だけである。

これは、「後三条院」を「三条院」と誤記しているように、長子の覚え違いか、誤写により、「こぞ見しに」も「いにしへに」と誤記したのではないだろうか。長子は、引歌によって自らの立場を強調することに重きを置いてはいるが、和歌そのものには、それほどの重要性を持っていないことが、今までの引歌・独詠歌の記し方によってわかる。つまり、引歌は手段であり、少々の意味の変化は気にしていなかった、といえるのではないだろうか。

このハと、ニの『栄花物語』で、中宮彰子が一条天皇を偲んだ和歌は、嘉承二年十月から十二月までの、同様の状況・先行歌を引き、共感する手法と同じものである。また、目前の事象（「花」、「内裏にてありし所ども、さびしげなる見る」）により、引き出されたものとして記されている。

そして、傍線部4の中宮が催した三十講において、宰相は、現在は鳥羽帝に仕える長子と出家した姉の三位殿

とは差別したが、中宮自らは、忘れずに私のもとに立ち寄ってくれるとして長子が志深いことを指摘し、涙にくれる様子を記している。

これは、再三長子が命日参詣などで強調してきた、鳥羽帝に仕えながらも堀河帝に対する変わらぬ忠誠の姿勢、言い換えれば志を、堀河帝の中宮から認められることは、二帝に仕えている長子の真意を、堀河院に仕えていた他の女房たちや世間に納得させる最大の効果がある。まして長子にとっても、これほど自身の心情の裏付けとなるものはないと思われる。

また、この時、長子の中で中宮に対する様々な感情（嫉妬、敬い等）が、中宮が心を開いてくれたことにより、氷解したことと思われる。過日、どちらが堀河帝の寵愛を受けたかを、身分ではかなわないものの、長子が心中で張り合っていたことは、上巻において表されていた(注9)。その中宮が、長子を労り、親しみを示したことは、長子の意識に大きな影響を与えるものである。つまり、堀河帝崩御から抑えられてきた、私的立場から起こる堀河帝に対する愛情や、解放する時を逸していた悲しみの感情が、中宮との和解により、誰にも憚ることなく、公然と記しはじめることができるようになるのである。この三月の出来事は、後に堀河帝に対する思慕が吐露され始める、大きな鍵となっていると思われる。

そして、この中宮とのやり取りを記す前に、長子の堀河帝への哀惜を兼方、彰子の哀しみと同一化し、強調することは、読む者に長子の堀河帝への変わらぬ志をさらに印象づける。

そして四月は衣がえと灌仏の日について触れている。衣替えの様子を「をかしとおぼしめしたりしが思ひいでられて」と、堀河院が面白く思われたことが思い出されて辛いので、女官たちの様子を人々は見ているが、自分はみたくない、とこれも目の前の事象によって堀河院のことを記すにとどまり、灌仏の日の左衛門督、源中納言が昔日を思い出して苦しそうな様子に、つられて長子も涙が浮かぶ。

われもせきかねられて、「おほかた例は外のかたも見じ」と思ひて、御几帳ひきよせて、見れば、御前、御几帳の上より御覧ぜんとおぼしめす。御丈の足らねば、いだかれて御覧ずる、あはれなり。大人におはしますには、引直衣にて、念誦してこそ御帳の前におはしましか。まづ目たちて、中納言にもおとらずおぼゆれば、人目も見苦しうて、御前、こと果てぬにおりぬ。

（諒闇の月日　六）

すると、鳥羽帝が几帳の上から外を見ようとするので、鳥羽帝を膝に抱いて見えるようにしてやる。この鳥羽帝の姿を見て、大人であった堀河帝は引直衣を召して念誦されながら見ていた、とまたもこの二帝を比べ、鳥羽帝の幼さと、頼りになった堀河帝の不在の悲しみが溢れだし、行事が終わる前にさがってしまう。

天仁元年正月から四月までは、堀河院の命日に欠かさず参詣しているという誇張と、幾度も繰り返される鳥羽帝と堀河院との落差の確認と、それによって強く浮き彫りにされる、頼りになった堀河帝の存在が、いかに長子にとって大きかったかを強く思い知らされる意識が、この繰り返しされる表現で明らかになる。

（五）

そして、三月で中宮に認められた長子の志と、それによって氷解した長子の堀河帝に対する思慕の感情は、惜しみなく吐露され始めることとなる。その発端ともいうべきものが、五月の独詠歌である。

五月四日、夕つかたになりぬれば、菖蒲いとなみあひたるを見れば。去年のけふ、何事思ひけん、菖蒲の輿、朝餉の壺にかき立てて、殿ごとに人々のぼりて、ひまなく葺きしこそ、美豆野のあやめも今は尽きぬらんと見えしか。

またの日も、空はさみだれたるに、軒のあやめ、雫もひまなく見えけるに、

さみだれの軒のあやめもつくづくと
袂にねのみかかる空かな

とのみおぼゆ。

やうやう十日あまりになりぬれば、「最勝講、いとなみあひまゐらせて」と聞きしかば、果ててのち十余日ばかりのつれづれ物語には、その日の論議といひいでしいみじさなど沙汰せさせたまひし、思ひいでらる。

（諒闇の月日　七）

この五月四日に菖蒲を準備する様子をみて、去年（嘉承二年）の五月四日は堀河帝も御在世であり、何を思うところがあっただろうかと思いを馳せている。そして、「またの日も」空は時雨れており、軒のあやめを根まで濡らし、悲しみの声をあげて涙にぬれる私の袂をもすっかり濡らす空であるよ、と堀河帝を失った悲しみを前提とした和歌を記していることから、この「またの日」は去年

の五月ではなく、今年（天仁元年）の五月五日であることがわかる。加えて傍線部5「去年」の今頃は何の物思いがあったかと、平和に殿上人たちが菖蒲を葺くのを見ていた、と過去「き」がこの傍線部5だけに使用されており、その前後には使用されておらず、この記の中心は悲しみに暮れている現在である天仁元年であり、悲しみを知っているかのように降る雨なのであるから、五月四日、五日は天仁元年と考えられる。

しかし、「またの日も」の「も」は添加の助詞であり、四日、五日も雨であることを示しているが、この天仁元年五月四日・五日前後の天気は、『殿暦』には、

三日　天晴、
四日　天晴、
五日　天晴、
六日　天晴、
七日　天晴、
八日　天晴、

『中右記』には、四日、五日の天候は記されていないが、その前後の天候は、

三日　天陰時々小雨、日者有炎旱氣、衆人成悦歟、
四日　ナシ
五日　ナシ
六日　天陰雨下――略、
七日　―中略、午後大雨、則天晴之後歸家、入夜又雨下、
八日　天晴―略、

とあり、この両記でも異なっていていずれの資料も信じがたいが、『殿暦』はこの年の五月は、十一日「天晴陰、雨時〃降、…今夜雨甚降」、廿二日「天晴陰、雨甚降」以外は、全てが天晴又は陰になっており、『中右記』には、右記の他に、五月十六、十八、十九、廿、廿一、廿四、廿五、廿九日に雨の記述がある。双方ともに雨の日が一致していないが、『殿暦』が天候の変化に重きを置かれて記していなかったことは明らかである。ここでは細かく天候の記されている『中右記』が信じるに値する可能性があるとみなして判断すると、天仁元年五月の三日に「炎旱」とあり、日照りが続いていたので、人々は喜んだとある。そして、四、五日以降の六、七日は雨が続いていたようである。これらから見ると、三日以降雨が続いていたとも考えられるが、四、五日は晴れていたとも考えられる。しかし、これらの資料だけでは雨が作為かそうでないかは断言できない。

また、今までの日記中和歌の傾向はどうかをみると、独詠歌をのせる場合と、先人の和歌を引く場合があったが、後者は長子が自らの悲しみを強調させたい場合に、先人が似通った状況で和歌を詠んだものを引き、前者は一首だけで、鳥羽帝再出仕要請で思い悩んでいるうちに涙に暮れ、その折に詠んだものである。これは、父頭綱の和歌を本歌にしたもので、上三句までをその本歌に頼っているのであまり参考にはならない。

では、作為の点から考えると、確実に作為をしたのは、現段階までは再出仕を決める十月の時間の流れのみである。つまり、実際にあった出来事を時間的に縮小したのであり、虚偽の出来事は記していないのではないか。

和歌の常套句である五月はさみだれていることを、自らの嘆く心に投影した作為とも考えられないことはないが、〈十月の作為の傾向から考えると、〉『中右記』の天候を信じ、五月初旬や中旬以降は雨の多い日々であったことを考えると、実際の情景を見ながら詠んだ可能性が高いと考えられる。下巻の後半にあたる天仁元年六月以降にも、作為の疑わしい箇所があるが、果して虚偽の出来事・事象の作為をしたのであろうか。事実に基づく、時間の作為だけではないのだろうか。この下巻後半の作為に関しては、別稿に述べたので参照して頂きたい。(注10)。

この五月は命日参詣に頼ることなく、先人の悲しみの表現に便乗することなく、長子の悲しみの感情を素直に表した月である。また、和歌に自信のない長子が、頭綱の和歌の三句までを本歌とした引歌の意味合いの強い一首目の独詠歌から、約半年をあけて載せられた二首目を、先行歌人の引き歌に、全面的に頼らなかったことの意義は大きい。これらは、五月の記を記すまでに、長子の中で堀河帝を思慕する心情が高ぶった為と考えられる。

つまり、この五月を記した時期は、日記現在と執筆現在とのずれが大幅ではない、ということを前提として、悲しみを解き放ち始めた意識の変革期とも呼べる。この変革は、三月に、中宮に長子の志が認められたことにより、頑に閉ざしていた感情を、徐々に解き放ち始め、堀河帝を喪った悲しみを素直に、自らの言葉で、表現できる状態になった証ではないだろうか。

そして、続いて五月十余日に毎年最勝講が営まれると聞いた（天仁元年には最勝講は行われなかった）ことを思い出して、昔帝が最勝講を終えてから十余日ほどの間のお話しには、その日の論議として言いだした素晴らしさを思い出して、五月の記を終える。これもまた、行事に

関わることであり、十日余りの日につながる思い出として記されている。

（六）

下巻の始まりである嘉承二年十月から十二月までは、崩御後から抑圧してしまった、堀河帝に対する悲しみの感情や思い出は、まだ具体的に記されず、そのかわりに、再出仕に関しての自らの苦悩する立場や状況を強調するための逸話や引歌、命日参詣が記されている。

これらの意識は、天仁元年正月に入り、再出仕が始まると、堀河帝の思い出につながる人物、行事等に出会って初めて思い出が語られ、引歌がなされる。しかし、これらの思い出は、女房の視点からみた公的な思い出で、寵愛を受けた私的なものではない。また、命日参詣の記述を繰り返すことは、嘉承二年十月から続く、世間（狭小に言うと堀河帝に仕えていた者たち）と自己に対しての堀河帝への忠誠の証明、または弁明である。また、鳥羽帝と堀河帝との事あるごとの比較は、二帝の人格の落差と、鳥羽帝に期待はしていなかったものの、長子が堀河帝時代に過ごしていた出仕とは全く異なるものであるという現実の落胆の大きさの証拠である。これに加えて、即位式で悟った自らの役割の重要性の低さや、白河院の後ろ楯のある藤原光子を中心とした一族が、鳥羽帝の周囲を固めており、長子は異端な存在であったことが、この再出仕で公的立場に自らの存在意義を求めようとしていた意識を、薄くさせたであろうことも考えられる。

その折、天仁元年三月に中宮の長子の志を認め、和解する発言があったことにより、悲しみを抑え、閉塞状態であった感情が解き放たれはじめ、まず公的立場からの悲しみを自らの言葉で表すことが可能になったことが、天仁元年五月の独詠歌に顕れている。その五月の意識の変革期を経て、寵愛を受けた思い出を表出することが可能になり、鳥羽帝の御世の公的立場に望めなくなった存在意義の代償を、過去の私的立場の確立に求めて、寵愛を受けた思い出や堀河帝を喪った悲しみを惜しみなくあらわしてゆくのが、天仁元年六月からである。

その六月からの意識は、稿を改めて論じている(注11)ので御参照頂きたい。

・本文は、『讃岐典侍日記全訳注』森本元子氏著（講談社学術文庫　91．5　第5版）による
・和歌は『新編国歌大観』による
・『増補資料大成　中右記』臨川書店
・『大日本古記録　殿暦』岩波書店

注

注1　拙稿「『讃岐典侍日記』――上巻における執筆意識の変化について――」（『甲南国文』第四十三号96．3）を参照して頂きたい。

注2　再出仕の決意後、従者達がまた宮仕えの生活に戻れることを喜ぶのを見て、「つれなくうらめしきに、十一月にもなりぬ」（再びの出仕　四）と記していることから、再出仕を決意することは、十月中となっていることがわかる。

注3　注1に同じ

注4　注1に同じ

注5　注1に同じ

注6　守屋省吾氏「『讃岐典侍日記』と和歌」（『平安文学研究』S52．6）の見解に従わせて頂く。

注7　守屋省吾氏「堀河帝の後宮――讃岐典侍日記形成の背景――」（『平安朝日記Ⅱ』有精堂所収）で明らかにされており、この見解に従わせて頂く。

注8　小谷野純一氏　『讃岐典侍日記全評釈』（風間書房S63．11）

注9　注1に同じ

注10　拙稿「『讃岐典侍日記』――下巻における執筆意識の変化について（二）――」（『論叢』（甲南女子大学大学院）十九号、H9．3）を参照して頂きたい。

注11　注10に同じ